

以上のように本文解説は多方面にわたっているが、それは須恵器の実像を描くことを意図したことによるものであろう。須恵器は編年を軸にして研究が大変、進んでいる分野である。また生産址や消費址（古墳・集落）の資料も膨大な量に達している。このような研究史と資料を踏まえて上梓された本書は、須恵器研究を専門とする者にとっても、門外の者にとっても大いに有益なものとなろう。

（A四判 七七頁 一九七九年七月
講談社 一八〇〇円）

（宇都宮 京都大学助手）

ジャケッタ・ホークス著

小西正捷・近藤英夫 共訳
河野真知郎・白土則子

『古代文明史』 1

原書は、J・H・ブラム監修、シリーズ『人類社会史』中の一巻、Jacquetta Hawkes, The First Great Civilizations, Hutchinson & Co, London, 1973. 両河・ナイル・インダス三河川流域文明の一般向け歴史概説書である。著者ジャケッタ・ホークスは、英国政府・ユニesco等の文化財

行政官、英国考古学振興会副総裁、ワシントン大学客員教授等を務めた考古学者であり、サンデー・タイムズ等の通信員でもある。

J・H・ブラムの序に拠ると——歴史に於ける「進歩」の法則が揺らいで以後、専門家は専門分野の微視的分析を事とするのが一般となり、その結果として、専門的知識と大衆を対象とした歴史とのギャップは広がる一方となった。そこで、あえて、専門家による通史的な歴史叙述をもって現状のギャップを埋めよう——という意図をもって、シリーズ『人類社会史』は編纂されたようである。

原書は、三河川文明の興起と都市生活の生成過程、両河流域に於ける諸王朝の興亡とその社会、インダス文明史、ナイル流域の王朝歴史と社会、を七部構成で叙述しているが、本書はその前半四部、両河流域の文明史までを翻訳したものである。

一・二部では、文明の指標に関する二つの見解を考察した後、基礎作業として気候・地理条件を述べ、ついで各文明の始まりから都市生活への行程を辿る中で、その文明としてのアイデンティティを提示して

いる。

三・四部は両河流域個別篇で、まず第三部で初期王朝期からアッシリア帝国崩壊に至る政治史を述べて枠組とした後、第四部で具体的に社会状況——衣食住から諸制度、宗教、美術等諸般——を横断面で把えて詳述している。第四部は本書の最も力点を置くところである。

以上が本書の簡単なアウトラインであるが、本書の何よりもの特徴は、今日までに専門家によって分析・実証された様々の局部的研究成果を実に多く駆使し、評釈を加えながら整合してストーリー・テリングしている点にある。創見の見られない恨みはあるが、概説書という性格上、又歴史学専門家ではない著者にとって、それは、望蜀というべきかもしれない。細かな点では多少疑問の箇所が無い訳ではないが、管見の及ぶ限りでは大きな誤認はなく、一般向け概説書としてゆき届いた作である。読者は本書を読む事により、たくましく専門家の研究成果を手軽に知る事が出来よう。この事こそ、このシリーズ編纂の意図だったのであり、その限りに於て、本書は首尾一貫した意義あるものである。

原文のシュメール語の翻字は一貫性に欠ける点があり、注意が必要である。訳文は、ほぼ慣用に従った用語でトレースされ、必要に応じて訳者の補注を付ける等、親切で読み易い日本語である。ただ多少不正確な箇所もある。例えば、九四頁……ウルクの名は『王名表』の中にはみあたらない↓大洪水以前の諸王の都市の中にはみあたらない(現実にはウルクの名は王名表の中に記載されている)、九五頁……そのうち最も重要なのは、ウルの王墓で発見されたウル・支配者たちの名前である。彼等は『王名表』にあるウル・第一王朝以前に即位し、ラガシュに次々と立った七人の王であるが、その名は『王名表』のリストからは全く見逃がされている↓(王墓で発見されたウル・支配者達とラガシュの七人の王は別人である。この箇所は関係代名詞のとり違いで、誤訳)、一二九頁……ラガシュの一地方長官によって開かれた↓支配者によって(原文 governor 当該者は都市国家ラガシュのエンシである)、二〇五頁エンシ↓エンシ(この文脈では原文 ensi にあえて『を補わない方が良いと思う』等。ニゲンナ(ニクエンナ)、オットー・エザー

ド(オットー・エツァルト)等、原語や人名・地名の表記は扱いのむづかしいところである。

とまれ、我国では古代文明史に関してこのような視角で著されたコンパクトな一般向け概説書は無いのが現状であるから、少しでも多くの方が気軽に読まれる事を希望する。なお、後半部は来年翻訳出版の予定だそうである。

(A5版 三三〇頁 一九七八年九月
みすず書房 二二〇円)
(大江節子 京都大学大学院生)

受贈図書

(一九七九年四月一六日~六月五日)

産業社会論集(立命館大学産業社会学会)

二一

忠敬堂古地図目録(The University of Wi Press)

一八

人文論叢(一橋大学一橋学会) 八一—四

日本海文化(金沢大学法文学部日本海文化研究室) 六

人文論叢(福岡大学研究所) 一〇—四

津田塾大学紀要(津田塾大学) 一一

韓国史研究叢報(ソウル国史編纂委員会)

二三

皇学館大学紀要(皇学館大学) 一七

岐阜史学(岐阜史学会) 六九

神道史研究(八坂神社内神道史学会)

二六—四

文化学年報(同志社大学文化学会) 二八

人文学(同志社大学人文学会) 一三四

国際関係学研究(津田塾大学) 五

九州文化史研究所紀要(九州大学九州文化史研究施設) 二四

唐律疏議索引、釈親考索引(中谷英雄編)

一五

東京商船大学研究報告(東京商船大学)

二九

歴史研究(大阪教育大学歴史学研究室)

一六

逐次刊行物目録(国立国会図書館)

五一年度

龍野市史(龍野市役所市史編集係)

一橋研究(一橋大学大学院) 四二

民族学研究所紀要(成城大学民族学研究

所) 三

論集(福島大学教育学部) 三〇—一

人文学科論集(茨城大学人文学部) 一二